

シンポジウム⑤中医と漢方，対話と展開

中医学から見た日本漢方

平馬 直樹

平馬医院院長

要旨

現代の日本では、漢方薬は主に医療用漢方製剤（エキス剤）として、臨床各科領域で諸疾患に応用されている。歴史的に用いられてきた名方剤を、現代医療にいかに応用するかに工夫が凝らされている。これは、健康保険診療の制約のなかで、エキス剤の使用が主流になっているためであるが、煎剤による治療が主流であった昭和期の漢方診療でも、古典的名方剤の運用による治療が行われていた。

さかのぼって江戸時代初期に主流であった曲直瀬道三の医学は、明医学の主流であった朱丹溪学派の医学を日本に広めたもので、当時の中医学を忠実に受容したものであった。道三は自らの医学を「察証弁治」と呼んでいる。これは現代の弁証論治とほぼ同義であり、診療の方法も弁証論治に近い。

ところが道三の医学の継承者曲直瀬玄朔は、全国から医学生が参集する学舎啓迪院では、広く宋金元明の折衷医学を規範として、啓蒙的な教育を施した。玄朔の弟子の長沢道寿は、『医方考』を研究し『医方口訣集』を著し、啓迪院の後継者岡本玄治は、『万病回春』『古今医鑑』を研究し『玄治方考』『玄治薬方口解』などを著した。道三の察証弁治は変容して、古典的名方剤の臨床運用を重んじ、方剤の運用のコツを伝授し、その裏付けに伝統的理論を援用するというスタイルになっている。これを「口訣の医学」と呼ぶが、私はこのスタイルを察証弁治の発展形である「方剤弁証」と位置付けている。道三の『衆方規矩』、長沢道寿の『医方口訣集』とその類書、甲賀通元の『古今方彙』などは江戸時代中期までの医師に遍く読まれ、臨床の座右に置かれ、名方剤の運用に注力する臨床の形が広がっていた。

その後18世紀の日本では、張仲景方を伝統理論（陰陽・五行・営衛・運氣）に依らずに、臨床症候と直接結びつけて運用する方証相対の治療が行われるようになった。古方派の誕生である。

古方派の主張するところは、従来の後世方派の医学が基づく医学理論（内経から明医学）は、古来の中国医学のものではなく、後世の医家が創作、潤色したもので、信じるに足りない。『傷寒論』には古の聖人の医学の姿が遺されている。『傷寒論』を古学（荻生徂徠の古文辞学など）の文献研究法で読み、体系化を試みるべきだ。『傷寒論』の条文が正しいか否かは、臨床の効果によって、判別される。実効あるものを採用するというものであった。

方証相對の方法は、症候を伝統理論で解釈せずに、現れた症状（ことに腹候に邪の部位が現れる）と臨床効果の高い張仲景方（傷寒論の処方）の薬効に当てはめて処方を選択するという方式である。方証相對の方剤運用によって、伝統理論は破壊されたが、古方派の仲景方運用は、寒熱・虚実などに拘泥せず、邪（古方はでは毒と称する）の部位とその排出経路を勘案して方剤を鑑別するもので、疾患や病状によってはこのような方式が有効な場合もある。演者は方証相對の方法を、方剤弁証の特殊な方式と理解している。

このように日本漢方は張仲景方、『和劑局方』や『万病回春』などの収載方など古典的名方剤の応用に工夫を凝らし、経験を積み上げてきた。それが、昭和から現代の漢方にも受け継がれているが、継承されているのは系統的な診断治療のシステムというよりも、名方剤の運用パターンのようなものである。現在の漢方は医療用漢方製剤が用いられることが主流であり、それにはこのような方式が便利であり、日本においてすでに定着している。

■ 中医学との出会い

私は、若い頃、北里研究所東洋医学総合研究所で大塚敬節先生と矢数道明先生の薫陶を受け漢方を学びました。そのため、江戸時代の文献とともに、中国の古典や医書を学ぶのが当然というなかで漢方を学び始めました。

漢方処方の運用を理解するためには、中国の大学の教材である『中薬学』と『方剤学』が有用と思い、これを学びましたが、その内容を理解するのに入門書である『中医学基礎』も理解しなければならないと考え、これも学びました。さらに臨床の手法とするため、昭和の漢方書のほか、江戸の医案、中国の古典医書、現代中国の中医学書を手あたり次第参照し、段々と中医学にもなじんでいきました。

中国へは1978年に医療訪中団に参加し、武漢・長沙の中医学院を視察したことがあり、その後1980年代におもに北京に数度にわたって短期研修に行き、また、来日した中医師たちとも交流しました。1980年代というのは、中国ではちょうど文化大革命（文革）が終わった時期です。文革中は中医学の教育が止められ、研究も出版も制限されていました。1980年代というのは、そういった制限から解放され、中医学の発展をはかる情熱に溢れた時代でした。

1987年から89年まで中国政府の高級進修生として、中国中医研究院広安門医院（北京）に留学し、内科・皮膚科・腫瘍科の3科で臨床研修を受けました。皮膚科を朱仁康先生と張作舟先生、内科を路志正先生、腫瘍科を朴炳奎先生からそれぞれ指導を受けました。具体的には朱仁康先生からは皮膚疾患への衛氣營血弁証の応用を、張作舟先生からは湿疹病変の治療を深く学びました。路志正先生からは脾胃の昇降を調えるような治療法、朴炳奎先生からは中西医结合による肺がん治療を学びました。そこでは、四診合参、つまり望聞問切をどのように統合するかということ、そして弁証論治の進め方といった神髄に接することができ、一生中医学でやっていくという揺るぎない学習の方向性を与えられました。

帰国後は中医学を専門として臨床を行ってきました。1990年に東京臨床中医学研究会の創設に参加し、初代の事務局長を務めました（当時の会長は故・張璠